

## G. M. ジャナカ K. グナワルデナ(スリランカ)

2004年12月26日は、スリランカの歴史で忘れられない日となりました。インドネシア・スマトラ島沖で発生した非常に強い地震により津波が発生し、スリランカ沿岸部に住んでいる多くの人々の命が失われ、生活や財産が甚大な被害を受けました。

スリランカは、インド亜大陸から約36キロメートルのところに位置する小さな島国です。熱帯性気候で、洪水、地すべり、干ばつ、サイクロンなどにたびたび見舞われます。しかし、近隣諸国に比べると、災害の規模は概して小さく、それが防災に対する無知や無関心につながっています。特に政府職員や一般住民の意識向上に関する十分な策がとられていません。

特に津波は、スリランカに稀な災害だったので、スリランカ国立防災センター所長補佐として私が思ったのは、政府職員や住民に十分な知識があれば、被害を半分以上に減らすことができたかもしれなかったということでした。

津波災害の後、スリランカ政府は、防災活動を強化する政策をとっています。2005年12月12日に、スリランカ大統領は、防災を担当する2つの省を新設することを決定しました。これにより防災省と災害救援省が設けられ、さらに、同年5月13日には国会により、防災政策強化のための防災法第13法が制定されました。

ADRCの客員研究員招聘プログラムは、経験と知識を共有し、日本の防災専門家と意見交換できる貴重な機会を提供してくれます。このプログラムにより、私は被災地の視察、防災機関の訪問、また防災会議やセミナーへの参加を通じて、様々な知識や経験を得ています。

この研究員招聘プログラムが実り多きものとなるよう、研修期間中に得た知識やノウハウをスリランカの防災力向上に生かしていきたいと思えます。

